

批判者と建設者 —長さんの経済思想—

伊豫谷 登士翁

目次

I 長さんと私

II 長さんの仕事

1970年代と30年代

相剋する経済思想

クライシスの時代の個人

I 長さんと私

第二次世界大戦の経験は、戦後の社会学者の問題関心を規定し続けてきた。ホブズボウム(Eric Hobsbawm)の言う『極端な時代』(The Age of Extremes. A History of the World, 1914-1991, Pantheon Book, 1994)のあの「大量殺戮」を、もうひとつの極端である「豊かさ」からどのように捉え、受け止めるかは、いまなお問われ続けている。あの戦争を、そしてファシズムという体制を回避する道はなかったのか。これは、長幸男先生が生涯を通して抱き続けた課題であった。社会科学を志すものにとって、批判精神を失わないことは重要である。しかし、批判者であることによって免罪されるのではない。危急の時代に、批判者が建設者としての役割を果たしえなかったことによって、日本のファシズムは加速されたのではなかったか。それは、長

先生が日本の左翼を自称する人たちに問いかけてきたことであつたように思われる。

長幸男先生の仕事は、金融／信用論から経済思想史／経済史など多岐にわたる。長先生の立ち位置は、批判的な真のリアリストであるとともに、民主主義リベラリストの最後の世代であつたかもしれない。私の学部時代には、『近代日本経済思想史』(有斐閣、1969)を新鮮な思いで読んだ記憶があり、大学院のときには、戦間期の国際通貨体制をテーマとしてきたことから、『昭和恐慌』(岩波新書、1971)から多くのことを学んだ。経済思想史や金融論の門外漢である私には、長先生を評価する能力はない。私がこのような文を書くことになったのは、東京外国語大学において長先生が担当されていた国際経済論の授業を引き継いだこと、同じ一般諸科目の社会科学に属し、当時5人いた経済学関係教員のもっとも若手であり、そして唯一の現役である、ということによるであろう。大学のなかにはまだ学問的な話しをする雰囲気が充満し、話し好きな長先生は議論をふっかけてこられた。また、大学から歩いていける距離にあるご自宅には何度も訪れ、武田清子先生を交えてお話しを伺う機会があつた。

最初にお会いしたのは、長先生が京都に講演に来られたときである。初めてにもかかわらず、その後何度も目にすることになる、片手を挙げてにこやかに挨拶された姿をいまでも覚えている。同じ世代の人たちからだけではなく、われわれのような若輩からも「長さん」と呼ばれ、多くの幅広い人から厚い信頼を寄せられてきた。東京外大の学長を引き受けられたのは、若手教員に担ぎ出されて、あえて火中の栗を拾われたからである。長幸男先生というよりは、「長さん」というのが相応しい。それゆえここでは、これまで通り、長さんと呼ぶことにしたい。

私が東京外国語大学に就任して間もない頃に、科学研究費（研究代表者 長幸男 1983年度から85年度）に基づくプロジェクトを通じて、一緒に仕事をする機会に恵まれた。研究テーマは、『転換期における都市化と農村社会の変容』であり、基本的なコンセプトは、「近代社会の曲がり角としての今日の地方産業都市の在り方を問うことによって、日本を含めた先進国社会の病理や途上国の問題に対して、従来看過されていた側面から光を当てる」（同『報告書』、「まえがき」）ことにあった。産業化の具体的な基盤としての地方産業都市、担い手としての地方企業家や名望家への関心は、「実業の思想」以来、長さんの一貫したテーマのひとつであった。科研費『報告書』の「総論」において、「近代日本経済思想史に関心を寄せてきた筆者は、国連大学プロジェクトで東南アジア諸国を旅して、日本・

西欧という比較史的視座だけでなく、日本・東南アジア諸国という比較史的視座の設定の必要を痛感したのである。こうした第三世界への視座は、近代そのものをリードした西欧世界の発展過程の再考察をうながすこととなり、また、日本近代史の再考察につながる」と書いている。そこでは第三世界の「産業化なき都市化」あるいは「偽都市化」と呼ばれてきた巨大都市形成をも念頭におきつつ、プロト・インダストリー論によりながら、「農村で展開される市場＝分業を基盤として成長をとげる町・都市こそ、“近代”資本制工業を成立させ、国民的市場を形成し、国際貿易を拡大していった経済力を象徴する社会現象といわねばなるまい」と述べられている。

このプロジェクトの目的は、日本の地方産業都市としての浜松を、富山と比較するという長さんのアイデアであった。同じく伝統的な産業を基盤として産業化を遂げながらも、富山は政府主導の電源開発による重厚長大産業の道を辿ったのにたいして、浜松は、江戸時代以降の木工技術などを発展させながら、地場産業として、自動車・自動二輪・楽器・電子機器などの軽薄短小の機械工業を発展させ、対照的な産業都市化を遂げた。報徳思想の広がった遠州浜松地域は、農村副業を発展させた近代産業が日本を代表する輸出産業へと育ち、日本のプロト・インダストリー形成と地域社会というテーマの典型事例と捉えられたのである。この総論の最後には、下記のような時期区分が提示され、産業近

代化と地方都市形成の観点から、近代産業を支えてきた民衆意識や共同性を踏まえた日本近代資本主義の発達史にたいする見取り図が示されている。

- 〔1〕 浜松のプロト・インダストリー（明治20年頃まで）
- 〔2〕 工場工業 Factory への前進と都市化の拡大（明治20年頃～大正3年）
- 〔3〕 工業技術の進歩と工業規模の拡大
— 商工中都市化 —（大正3年～昭和6年）
- 〔4〕 準戦時・戦時下での高度工業化（昭和7年～20年）
- 〔5〕 戦後

このプロジェクトで、浜松と富山にご一緒することが何度かあった。工場という現場の見学、地方の企業家や自治体関係者、地方史や地元経済の在地研究者、名望家という立場にある人びとへのインタビューは、長さんの独壇場であった。各々の地域固有の宗教や慣習などが近代産業化といかに結びついてきたのか。なぜ、そしてどのようにこの土地でさまざまな伝統技術が先端の近代産業へと結びつき、輸出産業にまで発展しえたのか。ミリ以下の単位の木工技術がミクロン以下の精度を要求される機械工業へ、さらに精密な電子技術へと発展する過程で、技術開発と現場がいかに緊密に連携してきたのか。

二つの産業の融合がどのように新しい産業を生み出したのか。IT やエレクトロニクスといった新しい産業が、なぜこの地方で生まれてきたのか。この地域の技術者を育成してきた地方大学の役割は何か。ここには、テクノポリス構想などの中央の政治経済に翻弄されながらも、産業化＝近代化を遂げてきたローカルな場所、そしてその担い手への長さんの眼差しと共感を読みとることができる。

II 長さんの仕事

長さんの仕事は金融論と日本の経済思想とにまたがっており、その両者の結実した仕事が『昭和恐慌—日本ファシズム前夜—』であった。同書の「あとがき」には、「おそらく昭和恐慌を中心とした前後の一時期は、日本近代史の中でも最も興味深い時代であろう。そこには、明治維新以後形成された日本の『近代』を批判的に眺めうるさまざまな矛盾面が露呈されているし、また、現代日本へと展開を遂げるあらゆる問題がめばえている。われわれは日本人とその社会について無限に豊富に学ぶことができるように思う」、と記されている。『昭和恐慌』は、岩波市民講座において高橋是清について話したことによる、とされており、1973年に「岩波新書」（以下、73年版と略す）として出版された。その後「同時代ライブラリー」（1994、以下94年版と略す）、「岩波現代文庫」（2001、以下01年版と略す）へと再録されて、長く読み継がれて

きている¹。94年版と01年版の「あとがき」からもうかがえるように、長さんが最も大事にされていた著作のひとつであろう。

なぜこの本が、これだけ長く読み継がれてきたのであろうか。本書が、第一次世界大戦後の恐慌下での国際金本位制復帰（金解禁）という政策の混乱を跡づけ、日本がなぜファシズムへの道を避けえなかったのかを明解に論じられたからだけではない。そこには長さん自身の経済思想が鮮明に表現されているからであり、長さんの経済思想こそが、現代を考える指針を与えているからである。ここでは、そのことを手がかりとして、長さんの経済思想を跡づけてみたい。

本書のテーマは、世界恐慌のさなかに金解禁を断行したことによって加速された恐慌とその延長上に現れてきた日本ファシズムである。しかし、同書は、改めて言うまでもないが、きわめて現代的な課題を抱え込んでいる。それは、第一に、1930年代の日本経済の危機的状況が70年代あるいは90年代と重ね合わされ、現代世界の原型として1930年代が描かれていること、第二は、混沌とした時代状況から新たな経済思想が生み出され、戦後の日本の経済学を二分することになる相対立する経済思想の相剋が表れてきたこと、第三は、混乱する時代状況に押し流されながらも、それを切り開く個人の投企が鮮

明に表れたことであろう。混乱する世界経済状況のなかにあって、それを切り取る経済思想が対立し、批判精神をもった理論が建設的な方向を示唆しえずに政策的な誤謬を拡大する。しかしそのなかで、ぎりぎりのところで現実的な対応をした個人が時代を先取りする。こうした様子が、本書において、見事に描き出されており、多くの読者を今も惹きつけているのである。

1970年代と30年代

本書が書かれた1970年代初めは、第一次オイルショックとともに、ドルと金との交換性停止によって戦後の国際通貨体制（ドル為替本位制）が大きく揺らいだ時期であった。68年にドイツ・マルクの切り上げが行われ、日本においても円の切り上げをめぐる論争が行われ、戦後世界経済の再編が課題とされた。円切り上げをめぐる論争では、原則的な金属論者とノミナリズムとの不毛な対立が繰り返され、原則論に基づいたもはやドルは紙切れだといった時代錯誤の議論がまかり通った時代でもあった。円の切り上げは不可避だと考えていた長さんは、金解禁論争時代に新平価解禁を主張した少数の論者に自分を重ね合わせたであろう。

この時期を1930年代の国際金本位制解体期と重ねる考えは、かなり一般的であり、長さんも、現代世界が抱えるさまざまな問題の原型として1930年代を位置づけた。バブル崩壊後に出された94年版「あとがき」においても、「現代

¹ 同時代ライブラリー版、岩波現代文庫版には、補論として「経済思想の相克—恐慌と戦争のはざま—」（初出『歴史と社会』第三号、1983）が収められている。

日本の骨格の原型（プロトタイプ）をかたちづくったのは一九三〇年代であった」と書いている。しかしながら、30年代がポンドの衰退へと向かったのに対して、70年代以降の国際通貨体制は、必ずしもドルの弱体化に進むのではなく、むしろユーロマネーを初めとして膨大な過剰流動性を生み出す変動相場制へと移行し、90年代以後は文字通りのカジノ資本主義の時代を迎えることになった。長さんにとって、1930年代の金本位制の最後の解体と70年代のドル管理通貨体制の解体が重ね合わされていたとするならば、90年代から現代まで続くバブルは、金本位制へと収斂してきた19世紀後半の国際通貨体制の確立期の課題に相当したのかもしれない。そうだとすれば、再び通貨とは何か、そして信用の果たす役割は何か、といった金融論の原理的な問いに立ち戻られたのではないか²。

金融論研究者としての長さんは、信用体系として現れる国内の金融と国際金融との接続を睨みながら、原理的な理論／法則と歴史的な制度とを結びつけて展開された。それは、抽象的な理論というよりは、具体的な歴史を重視した柔軟な議論であった。金融を見る目の基礎にあつ

たのは、貨幣の動きは実物経済の動きを円滑にする潤滑油であり、貨幣制度はあくまでも歴史的な段階に規定されるという点にあった。金本位制は、そのまま経済の鑑としてあったのではなく、時代状況によって変化し、市場経済を支える制度的な枠組みの再編によって変化する。

国際金本位制も、あくまでも19世紀後半から20世紀初めまでのイギリス経済を中心とした世界経済の時代の、特別な時期のきわめて短期間の制度的枠組みに過ぎなかったという理解である。基本的にはマルクス主義的な信用論によりながらも、1930年代の通貨体制の変化をいち早く読み解いたケインズを高く評価した。それゆえに、金融恐慌として発現した世界恐慌に対して、ニューディールに典型的に表れるような財政スペンディングを実施した当時の政策的対応を積極的に評価し、同時代として現れてきた日本の高橋財政を、ファシズムへの抵抗として摘出したのである³。

『昭和恐慌』は、1932年の井上準之助を暗殺した小沼正の生い立ちから書き始めている。「昭和危機の心情」と題された章において、没落する中産階級の状況が描かれ、本書の主題が「昭和恐慌とファシズム」であることが記される。

第一次世界大戦後にはいかなる形で戦後世界経

² 01年版の「あとがき」では、「今われわれが当面しているのは、一三〇年前の明治維新に似た多面的・構造改革であろう。」と述べている。もはや「恐慌（クライシス）」といった言葉で表現できるのではなく、グローバリゼーションと言われる時代は、むしろ近代あるいは近代化そのものが問われている、と言いたかったのではないだろうか。長さんの課題のひとつが恐慌の社会経済学であったとすれば、現代世界は恐慌すら利潤を生み出す機会へと転化した時代であり、国際金融という面から言えば、普遍的価値尺度としての金、そしてドル（為替）の機能停止が、膨大な過剰資本という資本主義そのものを解体する怪物を生み出したということになるであろう。

³ ケインズへの高い評価は、彼の時代感覚に対して与えられている。しかしこのことが、逆に、経済学を含めた社会科学の政策科学化を促したことは、注意しなければならないであろう。長さんが経済学の政策科学化をどのように評価されていたのかは不明であるが、1930年代という時点で、マルクス主義経済学がこうした感覚を欠落させていたことが、ここでは批判されているのである。

済を立て直すかが大きな課題となり、その焦点になったのが国際金本位制の再建問題である。イギリスにおいては、ドイツ賠償金問題において、ケインズが積極的な論陣を張っていた⁴。国際通貨体制への復帰を意味する金解禁は、日本経済にとっては国際的標準への復帰であり、日本の物価や賃金水準の国際的平準化であった。日本では、チャーチルとしての役割を演じた井上準之助の旧平価での金解禁論とマルクス主義経済学による資本主義批判としての国独資論（国家独占資本主義論）が論壇において対立し、新平価解禁論あるいは後にケインズ革命といわれる議論は少数派であった。ここで長さんが指摘するのは、資本主義擁護と資本主義批判が、むしろ共犯関係を切り結びながら、ファシズムを助長した日本の論壇における「戦前型民主主義と金本位制との“相対死”」（p.142）の構図であった。

相剋する経済思想

二度の世界大戦に挟まれ、世界恐慌を経験した1930年代は、新しい社会科学を生み出した時代でもあった。第一次世界大戦がヨーロッパの知の体系に与えた影響は大きく、戦争後の原状

回復は最大の課題であった。経済学においては、失業が最大の課題と認識され、それは一方では、ケインズ経済学を生み出し、他方ではマルクス主義の側からは帝国主義論／金融資本論が華々しく論じられた。日本においては、学問的にはマル経を中心として、日本資本主義論争が有名であるが、萌芽的な形で一般均衡論や財政学などが大学にも導入され、のちの近経（近代経済学）とマル経（マルクス主義経済学）に相当する分野が大学の講座や専門分野として制度化された。戦後の大学の経済学部における基本的な講座が整ったのはこの時期である。

長さんは、国際金本位制の再建と崩壊の過程に焦点を当て、歴史的な変化が生み出した経済思想の相克とその受容／土着化として表れる日本の経済思想を、現代の混沌とした思想状況を念頭において取り上げる。日本の思想状況においてマルクス主義が及ぼした影響は決定的に大きかったが、しかしながら戦時経済から福祉国家への移行を主導していったのは、のちにケインズ主義と称される経済思想であった。1930年代の経済思想が抱えてきた課題は、福祉国家体制の危機というきわめて現代的な課題と重なるのである。日本の経済学が直面した課題が、近経とマル経というイデオロギー的な対立図式で捉えられるのではなく、双方が直面する課題にいかに対処してきたのかという観点から評価される。時代の変化をケインズと同時代的に認識してきた日本の経済思想家を炙り出してきたの

⁴ ここで念頭にあるのは、J.M.ケインズ『貨幣改革論』、『チャーチル氏の経済的帰結』である。ドイツ賠償金問題は、金融論としては、トランスファー問題として展開されたが、具体的な問題としては、第一次世界大戦後に敗戦国であるドイツに対して、イギリスやフランスが天文学的な賠償を請求したことに対して、ケインズが、ドイツの賠償金支払い、ドイツからのダンピング輸出の拡大とドイツ市民の窮乏化を引き起こし、結果として、ドイツの社会的、政治的な不安定が増すとして批判したものである。

が長さんの仕事であった。ここには二つの伏線が潜んでいる。ひとつは、マルクス主義とケインズ主義を歴史的な状況への対応という観点から評価することであり、もうひとつは、日本という土壤に根ざした経済学／経済思想の追求であった。

マルクス主義が資本主義の脆弱性を鋭く指摘し、世界恐慌がもつ歴史的意味を十分に捉えていたことは評価される。すなわち、スミスやリカードらの古典派以来の経済理論ならびに経済思想が想定していた資本主義は、巨大企業を含めた金融資本の支配する独占資本主義へと移行し、植民地主義的な対外侵略を繰り返す帝国主義国に対する批判は、十分に説得力のある議論ではあった。二度の世界戦争とその間に挟まれた時期の世界恐慌は、まさに資本主義の危機であったであろう。しかしながら、マルクス主義からの資本主義批判は、基本的には、セー法則（供給が需要を創り出す）に基づき、金融論の観点からは、古典派と同じであった。それゆえに、世界恐慌という人びとの日常生活をも脅かす事態、そしてそれが世界戦争へと帰結するような事態に対して、体制批判は有効な対案を提供しえなかったのである。このことが、長さんの問題の根底にあった。ケインズに対する共感、古典派のパラダイムを根底から批判した点にあり、その日本的な流れを財政官僚や市井の経済評論家から掘り起こした。

マルクス経済学者の多くが資本主義批判を繰

り返し、金解禁をめぐる論争に積極的に加わらなかったことが批判される。たとえば、大内兵衛は、ケインズ『貨幣改革論』の影響を受けて、新平価解禁論に賛意をもちながらも、積極的な支持を表明せず、そのことが満州事変や積極財政（ニューディール型）への転換を困難にした、と評価される（p.148）。それに対して、石橋湛山、高橋是清、深井英伍、政友会の三土忠造への評価は高い。もちろん、彼らは、「前期的資本」から「新しい国家独占主義的政策体系」への移行を代表する。しかし政友会は、たんに旧来の農村や疲弊した中小資本家支援ではなく、新しく勃興してきた起業家支援を含むのであり、さらには需要を喚起することによって恐慌の激化を緩和し得るとされた。それゆえに、たとえば、三土の議論は、ケインズ有効需要政策の先取りと評される。

かつて経済学部には「経済学史」という重要な講座があった。『資本論』そのものの副題は、経済学批判であり、ケインズの『一般理論』は、古典派の議論を「特殊理論」と評価したのであった。経済学を学ぶものは、経済学という学問分野がどのように展開されてきたのか、ある時代の課題に対して古い経済理論が批判され、新しい経済理論が何と格闘しながら生み出されてきたのか、そして経済学が抱える倫理的な基盤は何であったのか、を学んできた。私が経済学史において学んだことは、たんに経済の法則を発見することではなく、経済学を人間の学とし

ての社会科学として切り開く方法であった。長さんの仕事は、衰退する経済思想、経済学の学史的理解の衰退への警告ではないか。

クライシスの時代の個人

最後に、本書が読み継がれる魅力は、なによりも、大きな歴史的な流れに巻き込まれながら苦闘する個人の選択あるいは決断が重視されていることにあろう。危急の時代において、合理性に基づく原則主義が結果として取り返しのつかない事態をもたらすことは、驚くほど現在の日本の状況と近似している。長さんは、一貫して、実学への共感、企業家精神や経済官僚の決断などに関心を寄せてきた。ここでいう実学とはかなり幅広いものである。激しい技術革新が進む中で経営者の決断や農村や地域経済の振興から、恐慌や国際情勢の変化に対応した経済政策の舵取りまで含めたものであり、直面する困難な状況に対して、経済学はいかなる対案を出せるのか、を問うことにあった。

井上が金解禁を掲げて蔵相に就任する挨拶に高橋は清宅に行ったときのやりとりを、長さんは、次のように読み解いている。「高橋の心は、党利党略に走り功名手柄を急ぐな、ということにあったろう。井上の態度がしばしば人に傲岸の印象を与えていたが、正に脂の乗りきった井上は、財政家として最高の業績をステップに、やがては政党の首領として天下に号令する日を心中ひそかに夢見ていたのではないだろうか。

高橋の目は井上の逸る心を見とおしていたのではなかろうか」(p. 57)。

井上あるいは金解禁論の評価は、同じく経済官僚であった深井英伍との対比で論じられる。官僚制という枠の中にありながらも、ぎりぎりのところで戦争拡大やアジア侵略に抵抗した官僚としての深井に対して、長さんは、「昭和初期の経済学者・思想家として一流であり、当時の日本の理性を代表する人物の一人」(p. 73)と高く評価する。しかし、興味深いのは、彼の行動も、「官僚の分限に自己の人間的能力と意欲(あるいは情動性)を合理的に自己規制する努力」が求められ、「クリティカルな時期には、官僚制と人間性との相克」(pp. 73-4)に陥らざるをえないと評される。深井への高い評価とは対照的に、井上への評価はきわめて厳しい。「井上の思想はその開放性(合理性ないし科学性)の故ではなく、その閉鎖性(その理論の論理整合性ではなく、究極的信条(ドグマ)としての合目的性一すぐれて時論的・イデオロギー的な性格)において捉えられねばならないであろう」(p. 75)。

ここには、困難な時代にドグマ化した学問に安住してきた研究者への批判が込められている。オウム返しのように資本主義批判だけを繰り返すマルクス主義研究者、古いマニュアル化した議論によって判断応力を欠いた政策担当者、そしてそれを支えてきた制度化された場所に安住する研究者たちである。しかし危急の際に、自

分の頭で思考し、時代を先取りした議論を展開した人たち、ぎりぎりの選択の道を模索した人たちもいたことが、長さんをこの本の執筆に駆り立てたのである。

長さんの渋沢栄一（長幸男校注）『雨夜譚』（岩波文庫）の解説には、世界恐慌のさなかに没した渋沢について、「渋沢が世を去った昭和六年にはイギリスも金本位制を離脱し、利潤の奔放な追求を許した自由放任の時代は崩れ去って、世界の資本主義経済は不均衡と歪みからくる社会的危機の脱出を必死で模索しつつあったのである。渋沢の義利両全の思想は、実業家の個人倫理であるにとどまらず、実は不均衡と歪みをうみだす経済システムに新たな均衡と平等をもたらすための社会的ルールの必要を訴えてもいたといえよう。」（p. 337）と書いている。

長さんの問題関心は、日本がなぜニューディール型の道を歩めなかったのか、と言うことである。同じく世界恐慌という事態に直面しながらも、一方はファシズムの道を、他方はニューディールの道を歩んだとされる。福祉国家に代表される戦後体制が、ファシズムに対する民主主義の勝利として構築された。そのことをどのように評価するのかは、現代という時代の課題を考える上で、きわめて重大になってきている。福祉国家は人びとにとって望ましい国家体制であったのか。あるいは福祉国家という体制を支えてきた世界経済の基盤は何であったのか。福

祉国家は何を切り捨ててきたのか。1960年代以降の新しい社会科学の勃興は、人種やジェンダーなどの新しい問題を浮かび上がらせ、冷戦体制崩壊以降、グローバリゼーションを含めた新しい認識枠組みを生み出してきた。再び、知の枠組みをめぐる闘争が起こってきている。

亡くなられる数年前であったか、長さん宅に伺ったときのことである。温厚な口調ながらも、私たちが進めてきた「総力戦体制」研究のプロジェクトに対して、痛烈に批判されたことがあった。総力戦体制論は、同じく現代世界の原型として、世界大戦期の経済システムを捉えるのであるが、戦後の福祉国家体制の原型として総力戦体制を位置づけるものである。長さんにとっては、ニューディールをもファシズムの一つの形態だという議論は、承伏しがたかったのである。

長さんは、経済学が、倫理観を欠落させ、数字を操る道具と化して、批判精神を失ってきたことを憂いていた。しかしそれとともに、批判者が建設的な対案を提示しえないことに苛立ってもいたのである。大学がますますいとも容易く批判精神を売り渡すような状況を、1930年代のファシズムの時代と重ねて見ておられたのではないか。

（いよたに としお・一橋大学）